

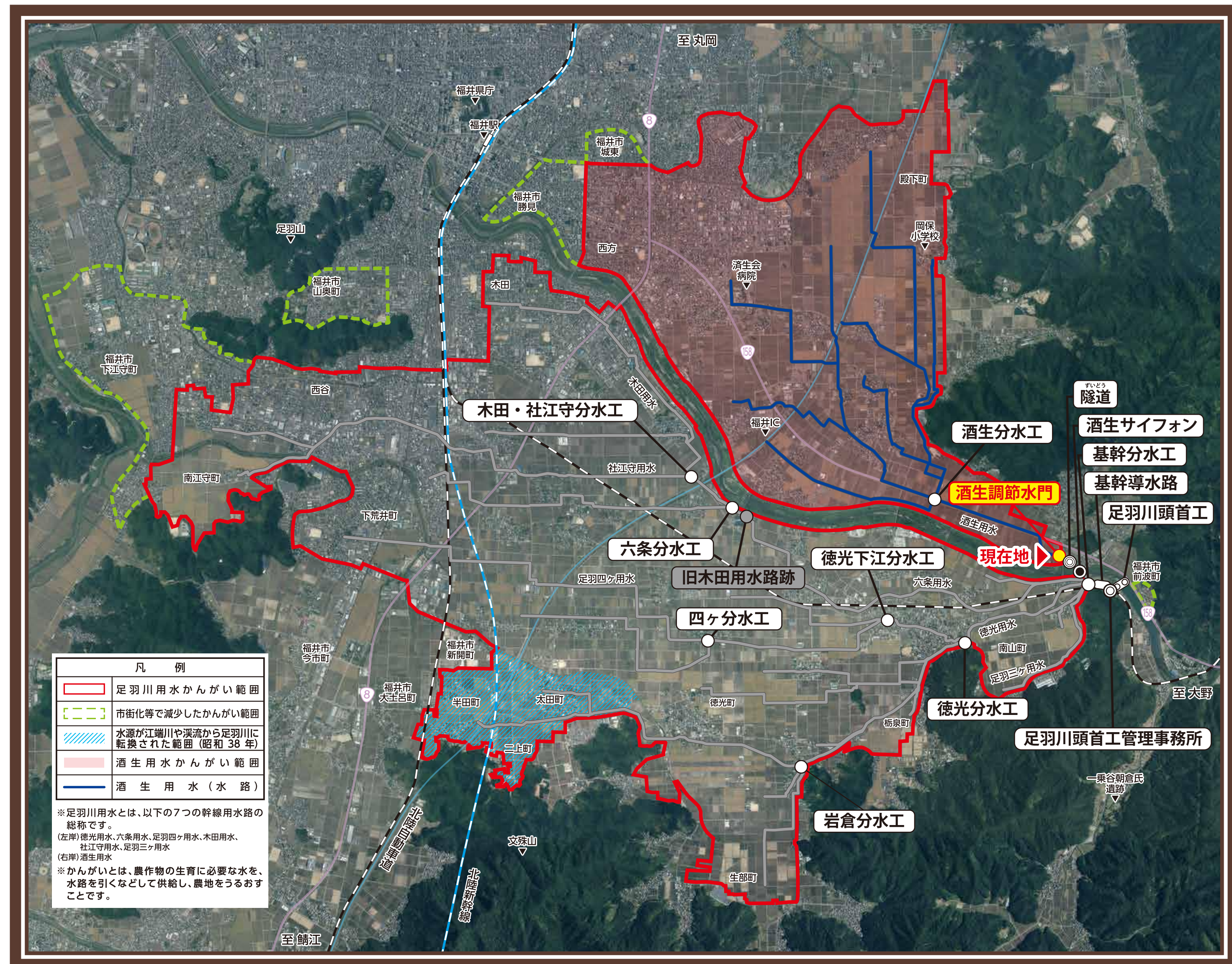
酒生調節水門

酒生調節水門は、酒生用水を構成する施設の一部で、昭和17年12月に竣工しました。

昭和38年の(旧)足羽川頭首工の築造まで、酒生用水は、足羽川の右岸に設けられた取水水門および^{ずいどう}隧道(トンネル)を通じて直接、用水を酒生調節水門まで導水し、ここでのゲート操作により、下流農地への送水量の調整や洪水時の止水などを行う重要な役目を担っていました。

昭和39年以降は、(旧)足羽川頭首工の竣工によって、酒生用水は頭首工上流の左岸側に設けられた取水ゲートから基幹導水路を流下し、基幹分水工地点で足羽川を酒生サイフォンにより横断し、これまでの^{ずいどう}隧道(トンネル)を通じてこの場所まで導水されるようになりました。

現在、調節水門としての機能はありませんが、今もなお、旧来からの水門や^{ずいどう}隧道(トンネル)を利用し、この足羽川右岸一帯の約600haの農地をかんがっています。



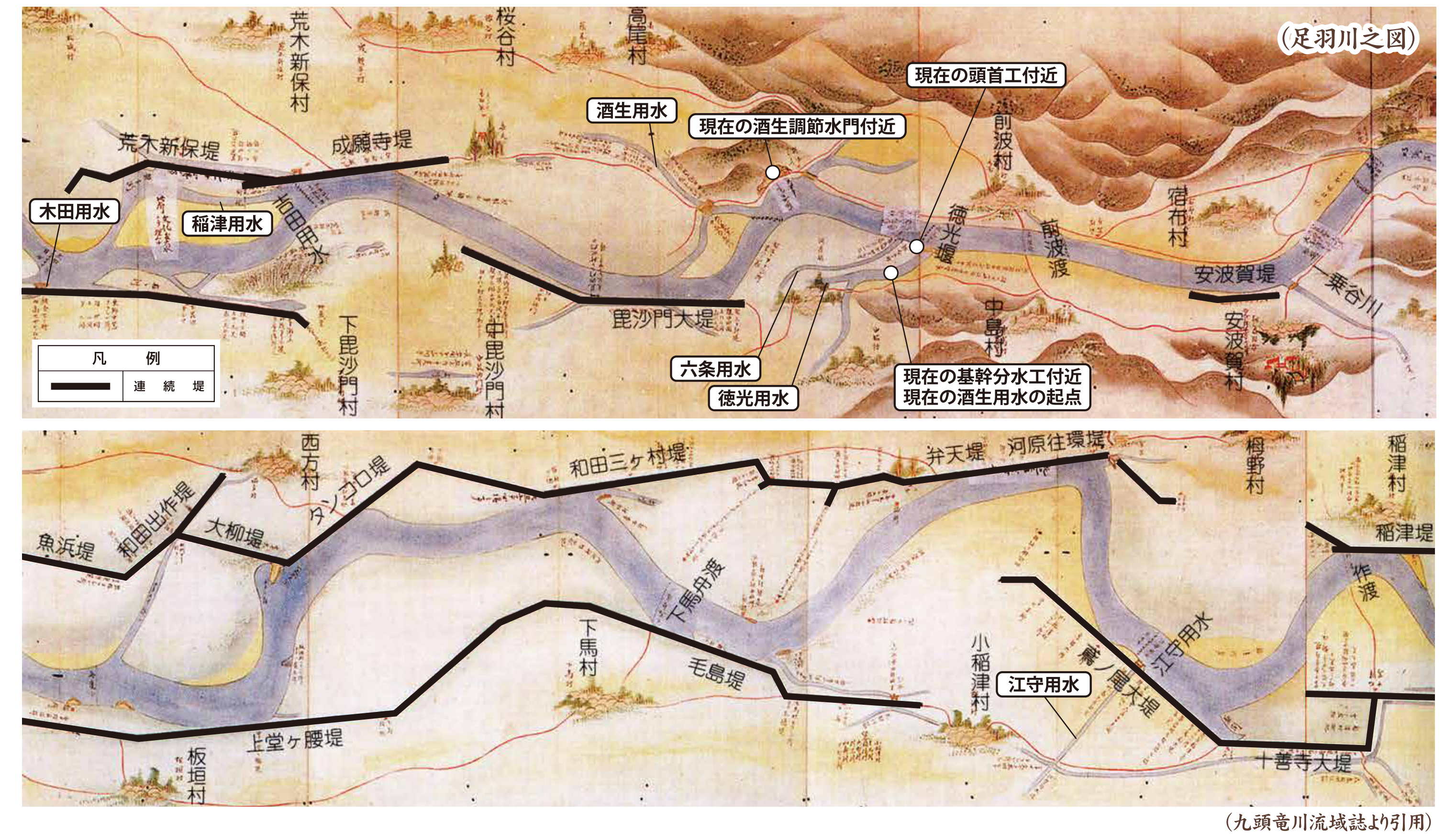
【足羽川用水とは】

足羽川用水は、福井市南東部にある足羽川頭首工より取水し、約2,000haの広大な農地をかんがいの幹線水路の総称で、7つの幹線用水74kmからなります。

用水の始まりは、奈良時代(7世紀頃)に開かれた荘園内の原始的な水路であると云われ、足羽川から直接、各用水を取水し、渇水期は絶えず水争いが続いていました。しかし、江戸時代(1710年頃)になると、用水奉行 戸田弥次兵衛公により、複数の用水を統合する当時としては珍しい合口のための堰の設置や、水路の分水地点に定石を布設し水争いを緩和するなど、現在の足羽川用水の礎を築いたと云われています。



また、江戸時代末期の状況を伝える「足羽川之図」には、福井城下を洪水から守るための連続堤や三角又などの水制、農業用水を取り入れるための堰堤も多く見られることから、足羽川は、藩政時代からすでに人工河川化が進展するとともに、かんがいの水源としても重要な役割を果たしていたと云えます。



【世界かんがい施設遺産に登録(県内初)】

平成28年11月8日に県内で初めて、足羽川用水が「世界かんがい施設遺産」に登録されました。

世界かんがい施設遺産とは

かんがいの歴史・発展を明らかにし、施設の適切な保全につなげるため、国際かんがい排水委員会(ICID)が平成26年に創設した制度です。

登録要件
(一例)

建設から100年以上経過した施設のうち、卓越した技術により建設されたもの。かんがいの農業の発展に貢献したもの。



※足羽川頭首工管理事務所前にある大型看板では、詳しい内容を説明しております。